

講師プロフィール

萩原朔美（はぎわら さくみ）



1946年11月14日東京生まれ。映像作家、エッセイスト。多摩美術大学名誉教授。金沢美術工芸大学客員教授。母は小説家萩原葉子、母方の祖父は萩原朔太郎。

寺山修司主宰の演劇実験室・天井棧敷の立ち上げに参加し、1967年4月に旗揚げ公演となる『青森県のせむし男』で初舞台。その後、丸山明宏（三輪明宏）との共演作『毛皮のマリー』での美少年役が大きな話題を集める。俳優活動の後、1968年『新宿のユリシーズ』にて演出を担当し、以降同劇団の演出家を務めるようになり、代表作に『書を捨てよ町へ出よう』『時代はサーカスの象にのって』などがある。

演劇実験室・天井棧敷在団中から映像制作を開始し、退団後も、時間や記憶をテーマにした映像作品を制作。榎本了亮、山崎博、安藤紘平らとともに実験映画作品を精力的に制作、世界各地で上映会が開催される。1973年8月アメリカ国務省の招聘により渡米し、帰国後、アメリカ文化センターでビデオアートの現在について講演、1975年に株式会社エンジンルームを設立して、代表取締役役に就任。雑誌『ビックリハウス』をパルコ出版より創刊し、初代編集長を務める。パルコ文化、渋谷系サブカルチャーといった文化を生み出し、牽引する。

著書に『「演劇実験室・天井棧敷」の人々』（2000年）『毎日が冒険』（2002年）『死んだら何を書いてもいいわ』（2008年）『劇的な人生こそ真実』（2010年）他多数。一昨年、世田谷美術館に、版画、写真、本のオブジェ 130点が収蔵された。2016年4月より前橋文学館館長。2023年7月より前橋市文化活動戦略顧問。



中村ひろみ (なかむら ひろみ)

東京都出身。明治大学文学部演劇学科卒業。1989年より群馬県前橋市在住。92年～演劇プロデュースとろんぷ・るいゆ主宰。場／環境の歴史や文化を踏まえ、劇場ではない空間を生かした硬質な芝居作りが得意。

2001年国民文化祭 in ぐんま開閉会式（小栗康平監督プロデュース）演出部所属、16年前橋文学館リーディングシアターvol.01「ラヴ・レターズ」（A・R ガーニー作、青井陽治翻訳）で萩原朔美館長と共演。

17年「この道はいつか来た道」（別役実作）、18&23年「夜汽車の人－萩原朔太郎の愛と詩の生涯」リーディング（菊田一夫原作、丸山博一構成）、19年上三原田農村歌舞伎舞台創建200年祭「夏の夜の夢」、20年前橋広瀬川空中演劇などプロデュース・演出・出演。

元群馬県文化審議委員。群馬大学情報学部「芸術表象論」「非言語コミュニケーション論」非常勤講師、群馬県立県民健康科学大学「舞台芸術」非常勤講師。日本演出者協会会員。一般向け朗読・演劇セミナー講師多数。

平田知久 (ひらた ともひさ)

1979年生まれ。和歌山県和歌山市出身。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（人間・環境学）。同大学院文学研究科研究員（グローバル COE）、日本学術振興会特別研究員（DC1）（PD）などを歴任後、2015年より群馬大学社会情報学部に着任。現在、群馬大学情報学部准教授。

専門は社会情報学／情報メディア技術史、近・現代哲学思想史。前者については、比較社会的な観点から、過去と現在のメディア利活用の比較、同時代の複数地域間のメディア利活用の比較に関する研究を、それらを捉える理論的な視座についての検討も含めて行い、後者については、サディズム・マゾヒズムという文学的表象とその同時代の哲学的思索との関係、および現代哲学思想におけるサディズム・マゾヒズムという概念の受容という二点から考究を行っている。

